



## 🌸 奈良文化財研究所創立 50 周年記念 事業を振り返って

2002年4月、奈良文化財研究所は奈良公園の春日野に産声を上げてから50年目を迎えました。2,3年前から創立50周年記念行事について所内で話し合っていました。準備を整えいよいよ実行の年を迎えることになったのです。所員一同大いに張り切り、それぞれの部署において役割分担を果たしました。

高松塚古墳の発見を機会にしておこなわれた『飛鳥展』以来、30年振りに開く『飛鳥・藤原京展』に関する準備は大変で、これまでの発掘成果を点検整理するとともに歴史的な解釈をほどこすという難事を経過せねばなりません。展示会の会期にあわせて「東アジアの古代都城」と「古代建築研究の新たな展開」という二つの講演会をおこないまし



東京都美術館での『飛鳥・藤原京展』開催挨拶

た。前者は中国・韓国の専門家を招いての国際研究会であり、奈文研とは日頃なじみの薄い東京会場でおこないました。記念の出版物として『山田寺発掘調査報告』『文化財論叢Ⅲ』『平城京条坊総合地図』をすでに刊行して参りましたが、その他にも準備しているものがあり目下印刷中という状況です。

こうした記念行事については、その都度『奈文研ニュース』に報告しているので改めて述べませんが、いずれも各界の好評を得たうえ、所員の努力が高く評価されたことを付け加えておきます。

展示会・講演会・報告書の刊行という3本柱の事業を短期間の内に進め、おおむね大過なく終了段階を迎えておりますが、日常的な研究事業に加えて各種の催し物をこなすことでいろいろなトラブルも生じ、所員にとって重荷になりましたが、成果を目の前にすると疲れも吹っ飛んだようです。このようにして、奈文研の職員は50年間にわたる研究成果を何らかの形で総括したわけですが、奇しくも国立の研究機関から独立行政法人の研究機関へと移行するときの節目に遭遇したのです。

奈文研は2001年に独立行政法人文化財研究所の1部署となり現在3年目に入ったところですが、研究事業に対する企画立案・計画・実施などそれぞれの局面で従来とはかなり異なった手法を取り入れ、研究内容についても大幅に改善してきました。中期計画にもとづく研究成果についてはこれまで以上に厳しい評価を受けております。当然のことながら、2002年度に創立50周年としておこなってきた数々の研究成果を土台にして、研究機関と個人の研究のさらなる飛躍・発展が期待されている状況をひしひしと感じる昨今です。

(奈良文化財研究所長 町田 章)

## 発掘調査の概要

### 旧大乘院庭園の調査（平城第352次）

平城京の東の京極にあたるかつての七坊大路を興福寺から南に下ると、荒池、そして右手に奈良ホテルのある鬼蘭山（飛鳥山）をへて、国の名勝に指定されている大乘院庭園があります。

平城宮跡発掘調査部では、この庭園を管理する（財）日本ナショナルトラストの委嘱を受け、復原整備に向けた資料を得るために、1995年から継続的な発掘調査を実施してきました。これまでの調査は東大池の周囲を中心に南岸から東・北岸へと進めてきましたが、1999年度の第310次調査からは西岸部を対象としています。文献や絵図による研究から、この場所には変化に富んだ景観をもつ「西小池」のあったことが知られていました。けれども、西小池は明治時代の前半には埋め立てられ、地上から姿を消してしまっていました。そのため、発掘調査による実態の解明が期待されたのです。

今回の調査は、西小池のうち南池の想定地と東大池との間の築山を対象に、2003年1月7日から開始し2月末現在ほぼ終了しています。2月22日には現地説明会をおこない、多勢の方に現地を見ていただきました。また、調査期間中には大乘院庭園文化館において「大乘院の歴史を掘る－十年間の発掘調査の成果から」展が開催され、好評を得ることができました。

さて、大乘院は、一乗院とならび両門跡とよばれた興福寺の門跡寺院です。その起源は平安時代にさかのぼり、当初は興福寺の北方、いまの奈良県庁のあたりにありました。治承4年（1180）、平重衡による南都焼き討ちによって罹災したため、元興寺別院の禅定院がおかれていた鬼蘭山の南麓に移り、ここを大乘院家と決めました。室町時代の宝徳3年（1451）、徳政一揆による焼亡後の復興では、尋尊大僧正によって、建物ばかりでなく庭園についても精力的な整備がおこなわれ、南都随一の名園となります。このとき園池の造営にあたったのは、名匠とうたわれた善阿弥親子でした。善阿弥は足利義政に仕えて銀閣寺の園池を造ったとも言われています。室町時代の整備では、東大池の北と南にある中島に西側から橋を架けたり、大池の西側にあらたに小池が造られたりしました。江戸時代の姿は、興福寺所蔵

の『大乘院四季真景図』等からうかがい知ることができます。

昨年度の調査からは、『四季真景図』に加えて、1939年に『庭園』・『風景』誌に紹介された平面図と検出遺構を重ね合わせることで、遺構の比定、あるいは発掘前の推定を試みています。事前の予測では、今回の調査地には、西小池南池の北岸および東岸、『四季真景図』に「ヲシマ」と記された中島の東半部、および「ヲシマ」から「連ナリハシ」によって結ばれた小島と対岸部、東大池と西小池を結ぶ流路の西岸にあたる嘴状の岬などが存在するものと考えられました。調査の結果、これらの遺構をほぼ予測された位置で検出し、同図の資料としての正確さをあらためて確認しました。

かつて奈文研におられた庭園研究者の森蘊おさむさんは、『中世庭園文化史』（奈文研学報第6冊 1959）のなかで西小池の復原を試みています。そのとき森さんは、ヲシマから連なる小島と嘴状の岬のありかたについて、3つの中島を石橋で連絡しつつ出島状とし、筋違いに州浜を突出させる姿が、京都にある桂離宮の松琴亭前の天橋立と州浜の意匠にたいへんよく似ていることを指摘していました。今回の発掘調査は、その情景を百数十年ぶりに再現することとなりました。（平城宮跡発掘調査部 次山 淳）



調査区全景（南から）

手前が州浜状の岬、奥左にヲシマ



具注曆木簡復元図

(表面) 矢印を中心に折り返してみてください

三月大	一日癸丑開	九坎天倉
	二日甲寅閉	婦忌
	三日乙卯建	厭対
	四日丙辰除	
	五日丁巳滿	重
	六日戊午平	
	七日己未定	血忌
	八日庚申執	血忌
	九日辛酉破	上玄岡虚厭
	十日壬戌破	三月節急盈九坎
	十一日癸亥危	重馬牛出椽
	十二日甲子成	絶紀婦忌
	十三日乙丑収	天間日
	十四日丙寅開	血忌
	十五日丁卯閉	厭対
	十六日戊辰建	
	十七日己巳除	重
	十八日庚午滿	
	十九日辛未平	
	廿日壬申定	厭
	廿一日癸酉執	
	廿二日甲戌破	九坎
	廿三日乙亥危	重
	廿四日丙子成	婦忌天倉
	廿五日丁丑収	三月中
	廿六日戊寅開	血忌厭対
	廿七日己卯閉	
	廿八日庚辰建	
	廿九日辛巳除	重
	卅日壬午滿	往亡

(裏面)

廿九日壬午滿	往亡
廿八日庚辰建	
廿七日己卯閉	
廿六日戊寅開	血忌厭対
廿五日丁丑収	三月中
廿四日丙子成	婦忌天倉
廿三日乙亥危	重
廿二日甲戌破	九坎
廿一日癸酉執	
廿日壬申定	厭
十九日辛未平	
十八日庚午滿	
十七日己巳除	重
十六日戊辰建	
十五日丁卯閉	厭対
十四日丙寅開	血忌
十三日乙丑収	天間日
十二日甲子成	絶紀婦忌
十一日癸亥危	重馬牛出椽
十日壬戌破	三月節急盈九坎
九日辛酉破	上玄岡虚厭
八日庚申執	血忌
七日己未定	血忌
六日戊午平	
五日丁巳滿	重
四日丙辰除	
三日乙卯建	厭対
二日甲寅閉	
一日癸丑開	九坎天倉

発見!! 持続3年の具注曆木簡 (飛鳥藤原第122次)

石神遺跡から出土したこの円盤状の木簡は、具注曆と呼ばれたカレンダーの一部です。干支の下には「建、除、滿、平、定、執、破、危、成、収、開、閉」の順にめぐる「十二直」が規則正しく並びます。その下には、「九坎」(万事に凶)、「婦忌」(この日の婦宅は凶)、「血忌」(この日の出血は凶)、「天倉」(倉開きに吉)など、その日の吉凶が記されています。「上玄(弦)」(上弦の月)、「望」(満月)といった、月の満ち欠けも書かれています。以上のような情報を読み解くことによって、表面が持続3年(689)3月8日~14日、裏面が同年4月13日~19日の暦

であることがわかりました。日本最古の現存するカレンダーです。「元嘉曆」という、中国から百済を經由して日本に伝えられた最初の暦です。

周囲が丸く削られているのは、廃棄後に木器として転用されたからです。もともとは、表面に3月、裏面に4月、それぞれ1ヵ月分の暦日を記した長方形の板であったと推定されます(復元図参照)。

具注曆は天皇の名のもと政府が作る正式の暦で、官司や諸国にはその写しが頒布されました。本来は紙に書かれた巻物ですが、同時に多数の役人たちがみられるよう、板材に書き写すという工夫をしたのでしょうか。(飛鳥藤原宮跡発掘調査部 市 大樹)

## 文化財関係研修の実施

### 中近世城郭調査課程

2002年9月26日～10月3日実施の同課程は、北は秋田、南は鹿児島から総数21名の研修生が受講しました。実質僅か5日間の研修ですが、城郭の発掘から整備にいたる総合的な研究の現状と城郭調査の方法論の理解を目指し、少し欲張って諸分野の先生方15人を講師にお招きしました。また今回、城郭の発掘調査の実際を理解して貰うために、各地の城郭の発掘調査ケーススタディと城郭付属遺構調査方法論を重視したカリキュラムを組みました。

研修生の反応は概ね好評でしたが、彼らの多くは考古学専攻で、専門以外の分野からの城郭研究、特に文献史学に関する講義に関心が非常に高く好評であった一方、各地の個々のケーススタディよりも基本的な城郭の考古学的発掘調査方法論（マニュアル）や実際の城郭遺跡での臨地講義を望む声が多くありました。研修期間、講義構成など反省すべき点多々ありますが、今後の研修に生かしたいと思っています。（埋蔵文化財センター 巽淳一郎）

### 発掘技術者研修「交通遺跡調査課程」

2002年10月23日～30日（8日間）の研修は、近年検出例が増加している道路遺構の構造や発掘調査上の留意点を習得してもらうとともに、古代の水陸交通体系やその諸施設に関わる専門的知識を身につけてもらい、交通関係遺跡・遺構をどう位置づけるかという糸口を得てもらうことを目的としたもので、今回初めて企画した研修で、かなり特殊な限定的な内容の研修でしたが、16名が受講しました。

カリキュラムには、「道路遺構の構造と調査上の留意点」「郡衙遺跡と交通」、北陸や関東・九州の事例報告などの考古学サイドの講義とともに、「古代の交通システム概論」「歴史地理学と交通路」など文献史学・歴史地理学という関連分野からの講義をも加え、また、座学ばかりでなく、兵庫県龍野市小犬丸遺跡や上郡町落地遺跡という山陽道駅家跡の現地に出かけた臨地講義も組み入れました。

研修生はそれぞれ交通遺跡の調査研究に関心を持って参加しただけに、熱心な受講態度でした。

研修内容は、少し時間の足らなかった講義もありましたが、有意義との評価を得ました。とくに、山

陽道駅家跡の遺跡現地にバスで出かけ、古代山陽道の路線をたどったり、遺跡の立地や現地に残る基壇や築地塀の痕跡とみられる土塁などを観察したことは、駅家の構造や官道のあり方を理解する上で大変大きな収穫であったと好評でした。

（埋蔵文化財センター 山中敏史）



兵庫県上郡町

落地遺跡での臨地講義

## 観光と遺跡

「観光」という言葉から皆さんが思い浮かべるイメージはどのようなものでしょうか。日常生活から離れて解放的な気分の下で遊覧を楽しむ、といったイメージの方も多いのではないのでしょうか。観光研究者の最大公約数的な定義は、堅苦しい表現ですが「通常居住地域を一時的に離れ、非日常的で好ましい空間と時間を消費（享受）すること」といったところです。蛇足ながら、こうした空間と時間の消費が観光者（「観光客」）自身の活力再生産の源になることは言うまでもありません。

ところで、観光地は、それ自体が観光の対象となる「観光資源」だけでは成立しません。魅力的な観光地であるためには、優れた観光資源の存在とともに、交通機関も含めた観光資源を利用するための良好な「観光施設」の存在が不可欠です。俗にアゴ（食事）アシ（交通）マクラ（宿泊）といわれますが（実はその前にイノチ（治安）がある）、交通の便が悪くなく、良好な宿泊施設と飲食施設が備わり、かつそれらの施設におけるサービスが適正な対価で提供されることが必要というわけです。

遺跡は観光資源としての資質を備えています。遺跡は現在から時間的に隔たった空間を残す場所であり、そうした意味で非日常的な空間であるからです。したがって、遺跡を観光資源として活用するという

アイデアは決して的外れではありません。もちろん、そのためには遺跡保存の措置ならびに観光者との良好な関係を取り結ぶ仕掛けが必要であり、遺跡保存整備がそうした役割を担うことになります。もちろん、遺跡を保存整備すれば、観光資源となりうるということではありません。個々の遺跡の観光資源としての資質が大きく関係するからです。また、観光資源とはなりえても地域が観光地として立ち行くとも限りません。観光資源として単独で魅力的な遺跡はきわめて少ないし、良好な観光地であるためには良好な観光施設も不可欠な要素であるからです。

遺跡研究室で昨年からおこなっている大規模遺跡の整備・管理・活用に関する研究では、こうした観光と遺跡の関係という視点も含めたアプローチをおこなっているところです。

(文化遺産研究部 小野健吉)



白水阿弥陀堂（福島県いわき市）

園池を発掘・整備し、観光資源的価値を増進

## 平城宮跡第一次大極殿正殿復原工事

文化庁が進めている平城宮跡第一次大極殿正殿復原工事は、基壇下部の凝灰岩化粧工事を完成させました。大極殿正殿本体は、基壇内の免震装置を本年4月半ばから設置し始める予定で、基壇上面の完成は来年2月末になる予定です。2003年2月末現在、



大極殿基壇全景（南東から）

素屋根の建設基礎工事に着手しており、完成は2004年1月末の予定です。写真は、今年1月初めの工事進捗状況です。

(平城宮跡発掘調査部 渡邊康史)

## 研究室紹介

### 保存修復科学研究室（埋蔵文化財センター）

#### Conservation Science Laboratory

保存修復科学研究室は、遺跡・遺物の保存と修復に関する科学的調査・研究をおこなっています。基礎研究として遺跡の構築部材や出土遺物に関する材質および構造研究と新しい調査法に関する開発研究もおこなっています。また、平城宮跡などから出土した遺物の実際的な処理をおこなうと同時に、技術的開発研究とその実用化もすすめています。

当研究室では、これらの新しい調査法や保存修復技術に関する情報を、学会や保存科学研究集会をはじめ、地方公共団体の発掘技術者を対象とした保存科学研修などを通じて公開しています。また、協力事業の一環として、地方公共団体などがおこなっている発掘調査や整備事業において、遺物の取り上げや応急処置をはじめ遺構の修復処理や復元法に関する専門的・技術的指導と協力をおこなっています。これらの活動は国内だけではなく、広く海外にもおよびます。2002年度は、ユネスコが実施したクムトラ千仏洞における現地環境調査と壁画顔料の材質調査の協力をはじめ、中国・炳靈寺文物保護研究所（甘粛省）が実施した涅槃塑像の修復事業の協力やイースター島・モアイ石像の保存処理に関する基礎研究をチリ国立文化財保存修復研究所と共同で実施しました。

最近おこなった開発研究では、オートラジオグラフィを利用した材質調査があります。この方法は遺物から発生している微弱な放射線を二次元放射線検出器としてのイメージングプレートに放射線エネルギーとして蓄積する方法で、レーザー励起によるルミネッセンス量をデジタル化して数量化・画像化することによって古代ガラス材質の同定を可能としました。この開発によって一度に数百点の古代ガラス遺物の材質同定が可能となり、日本列島における古代ガラスの流通が解明されることが期待されます。将来は、さらに他の遺物へと応用が広がる画期的な

手法でもあります。いっぽう、保存処理の分野では、従来から困難とされていたクスノキなどの交錯木理を有する大型木材の真空凍結乾燥法による開発研究が成功し、実用の域に達したことは、今後、より困難な大型出土木製品の保存処理に期待がもたれます。

(埋蔵文化財センター 肥塚隆保)

### 文化財情報研究室（埋蔵文化財センター）

文化財情報研究室では調査員2名からなり、15名の派遣職員の協力を得て、データベースの更新作業をおこなっています。また、さまざまな文化財からいかに有効な情報を引き出し、それをどのように電子化していくかについての研究もおこなっています。その一環として、遺跡に関する情報の統合的分析のために、GIS（地理情報システム）の研究も進めています。

当室で直接に入力作業をしているのは、図書データベース、遺跡データベース、写真データベース、航空写真データベースなどですが、他のデータベース、例えば木簡データベースなどに関しても、設計や文字データの変換、画像データの調整などに係わっています。また、データベースサーバやファイルサーバの管理・運用もおこなっており、内容面とともにハード面でも、管理部文化財情報課と協力して、奈文研の情報システムを支えています。

データベースにおいては、情報の信頼性が大切です。種々の資料からデータの入力をおこなっていますが、資料そのままを入力するのではなく、参考文献にあたり、いろいろな辞書を参照しながらの作業となります。（埋蔵文化財センター 森本 晋）



データ入力作業風景

### 退官に寄せて

#### 初めて奈文研に来た日

1969年の3月下旬、ポカポカ陽気のその日、私は



澤田正昭さん

東京を出て近鉄奈良駅に降り立った。プラットホームは木製の棧橋ふうで、それはまだ地上に出ていた。東文研の関野克先生と一緒に、4月から奈文研にお世

話になる私を連れて来てくださったのだろう。春日野の研究所本部でご挨拶をした後、ライトバンに乗せてもらい、バラック街さながらの平城砦に着いた。田圃のど真ん中にポツンとその一角をなしていたので、そう思った。そこは平城宮跡発掘調査部、その拠点だった。拠点の案内人は、黒セーターの端正な顔立ちの男性だった。その人は町田章現所長だった。入所後のほとんどの期間を町田さんの直属で過ごしたのも深いご縁を感じる。発掘の成果、保存科学的な問題点を中心にご案内いただいた。

管内を一回りしたところでちょうどお昼時となった。帰ろうとして、事務所にご挨拶に伺ったら、優しそうな眼鏡の先生が「昼飯を食べていきなさい！」と親しげに声をかけてくださった。これから仲良くしていただくためにはそれもいいかと、食堂という名のプレハブ小屋についていった。30人くらいがいっせいに昼食をとる。家族的でほほえましい光景だった。座席を確保したところで、ふと、入籍したばかりのわが妻をひそかに外に待たせていたことを思いだした。今さら帰るといふわけにもいかず、わけを話した。「オーッ！連れて来い！」。親睦をモットーにしている私は、妻と二人で昼飯をごちそうになった。ネギがたっぷり入ったみそ汁がおいしかった。やさしい先生は狩野久さんだった。何とも厚かましい新人である。その年の7月には、調査部の同僚3人と共に結婚のお祝いをしていただいた。恒例のチョンガー惜別の洗札を受けるのが慣わしだったからだ。洗札のようすを書く余裕は無いが、激しくも思い出深いパーティだった。

あっという間の34年間でした。楽しい思い出ばかりが脳裏をかすめる今日この頃です。奈文研に、そして先輩・同僚のみなさまに心からの感謝を申し上げる次第です。ありがとうございました！！

(埋蔵文化財センター長 澤田正昭)

## 雑感

1969年（昭和44年）に入所したときには、平城宮跡の発掘は内裏正殿の南に広がるプレハブ建物を調査事務所としていました。蚕棚のような木製の二段ベッドでの宿直もあり、鉄製の釜である五右衛門風呂に入った。翌年には今の資料館建物が新築され調査部はそこへ移転しました。このような平城宮調査の草創期の名残を知るの、われわれの年代が最後ということになるのだろう。



西村 康さん

このころ、月に一回所員会議があり、春日野の本庁舎へ出かけていました。発掘調査関連の本以外はこの春日野にあり、皆はこの機会に図書をみることも心がけていたようです。自分にとっては、市内へ出かけるのは、まだ奈良を知らない状態であったので珍しく、楽しみでもありました。会議の後で、先輩たちにつれられて博物館の前にあった食堂で昼食をとるのが恒例で、奈良らしい田舎料理を味わえました。

そんな状態の新人生活の中で、印象に残るのは、先輩や事務職員の皆さんが、われわれを一人前の研究者として、分け隔て無く接してくれたことです。むろん、われわれの方は、先輩と後輩という違いは常に意識していましたが、このような自由な雰囲気は小さな驚きでありました。学生時代に外から見ていた印象とはずいぶんと違ったところです。

そんな状態の新人生活の中で、印象に残るのは、先輩や事務職員の皆さんが、われわれを一人前の研究者として、分け隔て無く接してくれたことです。むろん、われわれの方は、先輩と後輩という違いは常に意識していましたが、このような自由な雰囲気は小さな驚きでありました。学生時代に外から見ていた印象とはずいぶんと違ったところです。

このように、先輩でも若輩でも研究者としては同じであるという意識が、研究所全体にあります、ということが奈文研の活力を生み出す源となっているのではないかと思います。

これからも、この伝統が継承されていくことを願うものであり、これがある限り、奈文研は発展を続けると信じています。

（埋蔵文化財センター 西村 康）

## 研究会の開催

### 日本遺跡学会設立

2003年2月1日、奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂において、日本遺跡学会設立総会が開催され

ました。

埋蔵文化財センターが2000年度～2002年度まで3か年かけて学会設立に向けた“研究集会”を積み重ね、なんとか学会の形に漕ぎつけました。設立総会には130名余の人が集まり、2003年2月22日現在230名ほどの方が会員になっていただいています。裏方を引き受ける事務局としては大変ですが、さまざまな分野からより多くの人に参加していただき、有意義で、かつ楽しい学会を創りあげていきたいと考えています。

「日本遺跡学会」とはなんぞや、何をする学会であるのか、については“設立趣意書”と“当面の活動テーマ”をご覧いただきたいのですが、要するに現代のわれわれが遺跡とよりよく共存、共生してゆくにはどうしたらいいのかを考える学会だと思えます。事務局は当面の間、文化遺産研究部遺跡研究室に置きますので、入会希望などは同研究室までご連絡ください。（文化遺産研究部 高瀬要一）

### 古代官衙・集落研究会

2003年3月13・14日の両日、古代官衙・集落研究集会を開催しました。この研究集会は、在地社会における律令国家支配の実態について、学際的に考え、調査研究成果や問題点を共有する場として1996年から継続してきているものです。今年度からは、この会を古代官衙・集落研究会と呼ぶことにしました。

今回は、昨年度の墨書土器をめぐる研究集会を受けて、「古代の陶硯をめぐる諸問題—地方における文書行政をめぐる—」をテーマとしました。その趣旨は、古代の陶硯や転用硯、墨を取り上げ、陶硯の変遷、器種構成、分布状況、陶硯出土遺跡と遺跡の性格との関係、陶硯の形態と使用主体の階層性、墨の生産技術・流通などをめぐる問題を整理検討し、官衙における文書作成や木簡記載のあり方についての研究成果と総合しながら、地方における文書行政や文字を介した末端支配の実態などについて考えることです。

研究報告は、吉田恵二「陶硯研究の現状と課題」、西口壽生「畿内における陶硯の出現と普及」、神野恵・川越俊一「平城京出土の陶硯」、生田和宏「城柵官衙遺跡における陶硯の様相—多賀城跡出土例を中心として—」、小田和利「地方官衙と陶硯—大宰府跡

出土例を中心として」、宮瀧交二「東国集落と墨書行為」、大川原竜一・山路直充「古代の墨」、岩宮隆司「末端文書行政の実態（1）－籍帳の作成過程をめぐって－」、樋口知志「末端文書行政の実態（2）－地方における荷札木簡の記載をめぐって－」の9本で、参加者は、地方公共団体の職員、大学・博物館関係者等で100人余りでした。

討議では、陶硯の器種・法量の違いが使用者の階層や遺跡の性格を反映するものか否か、転用硯の機能と定形硯との使い分けの有無、朱墨の形状や朱墨用途、墨の在地生産・流通と地方における墨利用者との関係、郷段階での文書作成の実態、地理的環境と木簡記載のあり方などが主な論点となりました。

討議の中では50倍ルーペによる転用硯の識別など有益な観察方法が示されたり、関東では定形硯は官衙が郡司居宅などに限定され、地方官衙識別の指標となりうることなど興味ある指摘もありました。

また、今回は、平城宮跡発掘調査部考古第二調査室の協力によって平城宮・京出土の陶硯の遺物も展示し、その遺物観察による休憩時の議論も活発で、情報交換に大いに寄与することができました。

(埋蔵文化財センター 山中敏史)

## 飛鳥・藤原京展

奈良文化財研究所創立50周年を記念して開催した「飛鳥・藤原京展」は2003年3月9日をもって全ての会期を終了しました。2002年6月1日に大阪歴史博物館から始まり、東京都美術館、東北歴史博物館、そして四日市市立博物館と、約10ヶ月の長期にわたる巡回展でした。どの会場も活気が満ちあふれ、来館者は合計16万人を超え、盛況のうちに無事終えることができました。設置したアンケートでは、「よくまとめられており、興味深かった」「壮大な歴史の姿に感動した」という声も聞かれ、一人でも多くの方に古代のロマンにふれていただきたいと願っていた我々も嬉しいかぎりです。この展覧会を開催するにあたって、慣れぬ展示作業に戸惑う点も多くありましたが、研究成果の公開普及活動の大切さを実感しました。この展覧会を機会に、奈文研の研究活動の理解者が増え、そして何よりも飛鳥・藤原宮跡を訪れる人が増えることを願っています。

(飛鳥藤原宮跡発掘調査部 奥村直紀)

## お知らせ

飛鳥資料館 春期特別展

ASUKA 1/500

—「飛鳥・藤原京展」帰還展—

開催期間：平成15年4月22日（火）～6月1日（日）  
《会期中無休》

開館時間：9時～16時30分 《入館は16時まで》

入場料：	大人	高・大学生
個人	260円	130円
団体	170円	60円
中学生以下は無料		

アクセス：近鉄橿原神宮前駅からバス岡寺前行  
「飛鳥大仏前」下車徒歩10分  
近鉄・JR桜井駅からバス岡寺前行  
「飛鳥資料館」下車

所在地：奈良県高市郡明日香村奥山601  
奈良文化財研究所飛鳥資料館  
電話 0744-54-3561



飛鳥中心部復元模型

編集 「奈文研ニュース」編集委員会  
発行 奈良文化財研究所  
Eメール jimmu@nabunken.go.jp  
http://www.nabunken.jp

